

# 仕合わせの和

## 死の向こう側

住職 谷川寛俊

人間の致死率は100%です。つまり生まれた時から人間は死に向かつて進んでいます。何やら『縁起でもない話』のように聞こえるかもしれませんが、ただ、死について語る事を『縁起でもない話』とされたのは、今はもう昔のこと。一昔前の『縁起でもない話』が、今や「エンディングノート」や「終活」という言葉が流行語大賞に選ばれる時代となりました。「終活」という言葉が流行した事により、自らの人生を顧みる貴重な機会を得ることになるのであれば、大変素晴らしいことではないかと私は思っています。

仏教では「四有説(しうせつ)」を説きます。これは、人間の存在・状態が常に変化しているという教えです。四つの「有」からなります。「生有(しようう)」・「本有(ほんぬ)」・「死有(しう)」・「中有(ちゆうう)」を繰り返すという教えです。ここでは「本有」と「中有」についてご説明いたします。「本有」とは、生きている姿で、目に見える状態です。「中有」とは、転生(てんしょう)するまでの目に見えぬ状態で、よく霊的なものが壁を突き抜けていくようなことが語られます。この四有を通して変化していくものの本体を「五蘊(ごうん)」といいます。「五蘊」とは「業(ごう)」であり、人間の行いが全て記録されていきます。また仏教は、自業自得・因果応報を説きます。この「業」は滅せず来世にも影響を及ぼします。これを三世両重因果といって、原因が結果を生み、その結果が次の原因となる

第222号

令和2年 9. 1  
(毎月1日発行)

### 真成寺 ホームページ



玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子  
TEL・FAX 0765-22-2268  
携帯 080-3744-2523  
こちらの番号でもお寺につながります。

るのです。日蓮聖人は『開目抄(かいもくしょう)』で、今の行いや姿形は過去の因による果であり、それが本来の因となる。つまり生きている現在(今)のありようが大事なであると示されます。生きている現在が本有であり、本有である今が「業」を良い方向に変える唯一のチャンスであると説きます。中でも特に大事なことは、シツカリとした死を迎える心構えをお持ち事が大切であると教えておられます。これを「臨終正念(りんじゅうしようねん)」と言います。生きること、死ぬことは修行です。生まれてから死ぬまでを「生老病死」といい、この苦から逃れることは出来ません。その中で自分自身を知り、

苦を解決し、乗り越えていくための教えを説くのが仏教なのです。仏教は、皆さんが幸せになる為の方法を説いています。あなた自身が幸せになるだけでなく、周りのみんなを幸せにする教えでもあるのです。生きること、死ぬことも、どちらも修行です。苦という毒を薬に変えていくのが法華経の教えなのです。

悩みの種に  
悟りの花を  
咲かせよう